

——「まだ左腕がありますから」 PHP「生きる」より——

春風がまだ頬には優しくない季節だった。妻は早々と衣替えの用意を始めた。新一年生になる長男が、買ったばかりのランドセルを幾度も拭いている光景に、とても心地よい幸福感に家族みんなが浸っていた。

休日、残業続きで、私は長椅子でうたた寝した。妻が掛けてくれた毛布が暑苦しくなった。それを取り除き、立ち上がると一瞬、天井がくるくると回り、きつい目まいがした。左耳から「キーン」という金属音が響いた。水泳のあとに水が抜けないときのような違和感がした。疲れのせいだと思い、その日は早めに寝た。だが、翌日にもその症状は続き、近所の耳鼻咽喉科で診てもらった。

すぐに病名はわからず、検査で「突発性難聴」と診断された。二カ月ほどの入院で治癒ちゆするとの医師の言葉に安堵感を持った。しかし、二カ月を過ぎても、多少の好転は見せたものの、完治には至らなかった。不安が募ってきた。本を開けば、この病気は原因が不明であり、患者の三分の一しか完治しない。それも三分の一は治らない「難病」だ。百万人あたり三百人弱の発病率で、確立した治療もないと聞けば、落胆は大きい。焦っても、時間が過ぎるのは早い。

一時帰宅が認められたある日、一人で電車に乗った。右耳は大丈夫だった。私の隣に、小麦粉の匂いがする青年が座った。パン職人だろうか。その匂いが車内に充満した。乗客たちの視線が彼に集中した。平服だが、背中が少し突き出て、義手が見えた。ゆっくり観察すると、右腕がない。

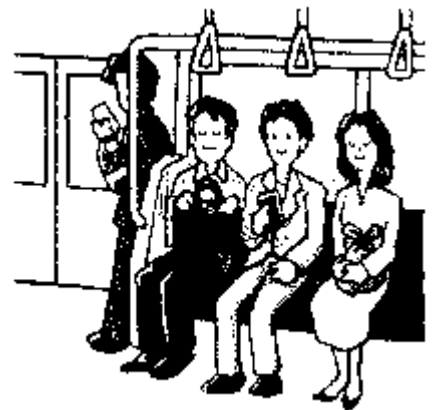
少しずつ、車内が混んできた。彼の目の前に腰の曲がった老婆が立った。すると、彼はすぐさま立ち上がり、老婆に席を譲った。一瞬、老婆はそれを躊躇ためらった。右腕がないことに感づいていたらしい。

「あんたこそ、不自由なお体でしょ。」

その言葉に私は躊躇ちゆうちよした。左耳が聞こえないなど、外見からは判らないが、私も不自由な人間に属している。青年は、老婆にすぐさま答えた。

「何が不自由なものですか、まだ左腕がありますから」

その言葉に赤面した。老婆は素直に青年の気持ちを受け入れ、私の隣に座った。すぐに老婆は居眠りを始めた。そこには、何の違和感もない。青年は左腕で吊り革をつかみ、老婆の寝姿に微笑みを送っている。義手は形だけで機能はしていない。電車が揺れるほどに、それも同じ方向に揺れた。



青年の左手は右手の分を補っているのか、真っ赤に腫れあがり、指の節にはタコができていた。彼はパン職人だと実感した。毎日、左手だけで小麦粉をこねる姿を想像した。

「まだ左手がありますから」

それは決して言い訳でもなく、自分のありのままを表した言葉にすぎない。それを素直に受け入れ、「ないものを悔やんでも先には進めない」と言い換えた言葉でもある。家にたどり着くまで、その言葉が耳底に残った。

タクシーで帰るものと思っていた妻は、私が電車で帰ってきたことを叱責^{しっせき}した。小心な私は妙に涙が流れた。それに驚く妻に、青年の話をした。彼の行動に賛辞を送る気持ちがまだまだ弱っていた。お互い、将来への不安が心の中で渦巻いていたのだ。確かに、完治せずこの状態が続けば、仕事に支障が出る。休職から退職に追いやられるかもしれない。それを入院中、妻は^{きぐ}危惧していたが、口には出さなかった。それは私も同じことだ。

その晩、長男と風呂に入った。私の左耳が聞こえないのを彼は知っている。一緒に「夕焼け小焼け」を歌った。小学校への夢を一方向的に話した。ふと、あの青年の親を思った。どんな教育をしたのだろうか。

「まだ左腕がある」なんて、どんな心から生まれてくる言葉なのか。私は長男を強く抱きしめた。

「父さんの耳が聞こえなくなったら、どうしようか」実に弱虫の私が出た。

「手話もあるから大丈夫」六歳の子どもの言葉ではない。

私がいないうちに、妻と話し合ったのだろう。涙があふれ出そうな顔を湯船に沈めた。

「もっと生きる勇気を持って」、自分への叱咤^{しったげきれい}激励が泡になり、それが子どもに聞こえたのだろうか。彼は嬉しそうに、妻が広げたバスタオルの中に入っていった。そんな姿に、私自身に「弱さ」の殻を破る勇気が出てきた。

それまで以上に、自分に素直になり、医師の治療行為に従い、少しずつ効果が出てきた。

右腕の再生はない、あの青年が「まだ左腕がありますから」の言葉が、私や家族に勇気を与えてくれた。

私には聞こえる可能性が残っている。仮に両耳が聞こえなくなっても、「まだ家族がいますから」と、答えられる私になっていた。